



Title	永正三年笛彦兵衛伝書『龍吟秘訣』
Author(s)	天野, サチ
Citation	演劇学論叢. 2010, 11, p. 439-461
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97471
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

■資料紹介

永正三年笛彦兵衛伝書『龍吟秘訣』

天野　サチ

『龍吟秘訣』は、早稲田大学演劇博物館所蔵になる、永正三

(一五〇六)年原奥書を有する、桧垣本栄次(彦四郎・彦兵衛)の笛伝書の転写本である。彦兵衛は、『四座役者目録』によれば、「左衛門が弟子也。若名彦四郎ト云。名字桧垣本ト云。世話ニ笛彦兵衛ト云。大成男ノカシラニ白キナマズノアル人也。名人也。

(中略)大永七^{「比果ル。」}とある。尤も、この没年に関しては、江島伊兵衛氏が、鴻山文庫蔵彦兵衛伝書『遊舞集』に、死後のはずの天文六年の在判奥書がある事を根拠に、『喜多』昭和十一年二月号二、笛彦兵衛尉吹初メ美濃彦兵衛ト云ヒ、文明十二年——天文十九年在世、行年七十一トアリ。四座目録ハ大永七年頃卒トアリ。此本ニハ、次ノ如ク天文六年在判ノ識語ヲ写セリ。大永七年没ハ誤リナラン。『喜多』説ヲ採ルベシ」と指摘されている(『遊舞集』添付メモ)。彦兵衛の没年については、その後天野文雄氏の考証があり、『証如上人日記』の記事から天文八(一五三九)年までは存命であったらうとされている。天野氏の論稿には、没年以外にも彦兵衛の事跡についての考察

がある。^①

彦兵衛は桧垣本を冠して呼ばれている所から、吉野桧垣本に本拠があつた、所謂桧垣本猿楽の出自と思われる。また、『森田流奥義録』では桧垣本はチカイと振り仮名が打たれているが、本書の中で、彦兵衛は自らの流儀を「千賀意流」と呼んでいる。『四座役者目録』によれば、一噌流の始祖中村七郎左衛門や、森田流の遠祖千野与一左衛門も彦兵衛に師事し、春日流、藤田流の祖も彦兵衛の弟子筋に習ったというから、後世まで伝わった笛の流儀は皆彦兵衛の流れであり、その彦兵衛の著した伝書中、最も奥書年の古いのが本書である。

識語によると、本書転写の経緯は、以下のようになる。

観世座桧垣本彦四郎栄次(永正三年)——観世座与左衛門国広(永禄五年写、河瀬四郎左衛門宛)——小宮山全進昌世——青木光通(明和六年写)

ここにみえる観世座与左衛門国広(天正八年没)は著名な太鼓方であり、『四座役者目録』にも所見が多く、太鼓伝書を多くあらわした人物で、彦兵衛と同じ桧垣本姓である。また、小宮山空進昌世は、『寛政重修諸家譜』によると、正徳元(一七二二)年に家宣に拝謁し、享保六(一七二二)年から宝暦九(一七五九)年まで代官をしていたという。在任中には支配所牧場で配下に不正を働かれたり、巡見の役人と租税の談合をしなかった事から、「これ昌世が等閑なるがいたすところなり」とか、「其職事に意をもちひざる」と度々出仕を止められている。また、河瀬四郎左衛門、青木光通は不明の人物である。

本書の書誌については、『早稲田大学演劇博物館特別資料目録5』に記されるとおりだが、改めて記すと、以下のごとくである。

235×176 cmの写本。袋綴、一冊。共紙表紙。表紙に「永禄五年／龍吟秘訣 全」を打付書き。内題なし。墨付37丁。料紙は楮紙。「安田文庫」の蔵印がある。

【図版はインターネット非公開】

【図版はインターネット非公開】

また、本書には錯簡があり、十九丁と二十丁が入れ替わっている⁽³⁾ので、翻刻では、次に述べる『全笛集』を参考にして本来の形に改めた。

さて、『龍吟秘訣』とはほぼ同内容の書が、西尾市岩瀬文庫に、「笛之書」の書名で所蔵されている。「笛之書」という書名は、岩瀬文庫に入ってから付された名称で、本来の書名は「全笛集」である（この書の影写本が東京大学史料編纂所にあるが、ここでは「令笛集」とされている）。その書誌は以下のとおりである。

167×329 cmの横本の写本。袋綴、一冊。共紙表紙。表紙左上隅に小字で「全笛集」とある。内題なし。墨付31丁。料紙は美濃紙。「岩瀬文庫」の蔵印がある。

この『全笛集』は、慶長二（一五九七）年牛尾惣右衛門尉の書写になるもので、編末の識語によれば以下のような伝来が知られる。

観世座松垣本彦四郎栄次（永正三年）——観世座与左衛門国広（永禄五年写）——観世座彦三郎——牛尾惣右衛門尉親頼（慶長二年写、小幡弥兵衛宛）

また、この『全笛集』には江戸後期頃の所有者によるらしい紙片がはさまれていて、それに、「薩州住中西十郎左衛門当時

長門右衛門ト云人所持ノ本、安永十年正月廿六日、園田七五郎殿此方持参被致事」とある。

奥書に見える観世彦三郎は金春宗意（慶長十七年、七十五才没、観世宗悧の弟、大鼓は高安道善に、太鼓は国広にも師事）、牛尾惣右衛門は慶長頃の笛役者で、この牛尾については牛尾美江氏の詳しい考察がある⁽³⁾。

さて、慶長二年に牛尾から『全笛集』を相伝されている小幡弥兵衛は『近代四座役者目録』に「今ノ虎屋長門」としてみえている京都の手猿楽で、同書には、「少進ナドニモ能ヲ習。ヨクモナシ。サイコクノ薩摩殿ニイル。果ル」とある。この小幡弥兵衛すなわち虎屋長門については、片桐登氏や林和利氏による詳細な研究があり⁽⁵⁾、それによれば、虎屋長門は本名が小幡弥兵衛、先祖は近江国小幡村を領していたようで、十二歳の時に関白秀次に仕え、慶長七年に島津家久に召し抱えられ、同九年に朝廷から長門守を受領し、寛永初年頃に姓を小幡から中西に改め（名乗りは秀長、慶安三（一六五〇）年に没した役者である。また、『全笛集』にはさまれていた紙片の「中西十郎左衛門當時長門右衛門ト云人」は小幡弥兵衛（虎屋長門）の孫にあたる長門右衛門秀乗である。

以上を要するに、岩瀬文庫蔵『全笛集』は、慶長二年に虎屋長門（小幡弥兵衛、のち中西秀長）が牛尾から相伝されて、中西家に伝来した本であり、安永十（一七八二）年に園田七五郎という人物を介して挿紙にメモを記した人物のものにもたらされたと

いうことになる。

以上のように、『龍吟秘訣』には『全笛集』という同根の伝本が存在しているのだが、『龍吟秘訣』と『全笛集』を比べてみると、『全笛集』の方が書写年次も古く、慶長前後に活動した笛役者の書写だけあって、『龍吟秘訣』に見られる不完全な文や、笛の音高の知識のないことに由来する誤字がなく、また、『龍吟秘訣』のような錯簡もない。また、『龍吟秘訣』の「ひしき」が『全笛集』では「ひ声」とされていることも注意される。⁶⁾

また、『龍吟秘訣』と『全笛集』の違いとしては、『龍吟秘訣』には、『全笛集』にない、「加」と頭につけた、「観世与左衛門国広雑談にいはく」、「観世与左衛門伝」という記事が、楊貴妃「101」と師子「113」の項目にあることがあげられる。たとえば師子については、太鼓の方の「追い懸ける手、追いまハす手」が、笛の「ぬくる手、おとしかくる手」に相当すること、また、「笛の長短の吹上」という、現行獅子の乱序のところの長短の旋律と推測されるものについてなど、笛と太鼓の具体的奏法について記されている。なお、「加」とされた箇所以外にも、『龍吟秘訣』には増補が施されている。

さて、『龍吟秘訣』という外題は、『全笛集』の存在からも、当初からのものではないことは明らかだが、この書名は本文「3」に、「笛は龍の吟スルこえと云説もあり⁷⁾」とある所から取られたと推測される。表紙に打付書で、「永禄五年 龍吟秘訣 全」と国広の書写年を採って書かれてある。横笛のことを龍吟

とか龍鳴というのは、多くの楽書に見られ、たとえば、本書の奥書年と近い永正九（一五二二）年成立豊原統秋『體源抄』にも、「笛ヲバ龍吟ト云」とある。則ち『龍吟秘訣』とは「笛の秘訣」ということであり、長承二（一一三三）年成立大神基政『龍鳴抄』と同じ趣の題の付け方であると言える。

なお、『龍吟秘訣』と他の笛伝書との関係について記しておく、と、笛の稽古についての記述「2」と、笛の由来の記述「3」の部分的に重なる記述が『笛秘書集』『遊舞集』にある。¹¹⁾¹²⁾

また、本書は、「笛一道においてこの書に越る書なし」と書かれてあるとおり、整理された構成のもとに、各曲の頭附から、舞曲の特殊奏法、笛の作法などが記されており、笛の演奏者に

【図版はインターネット非公開】

とつては、宝山に入ったような書であるだろう。中でも、別格、基本曲として『翁』と『高砂』について多く述べられているが、たとえば『高砂』の頭附を、現在の頭附と比較してみると、基本的に重なる部分があるのは、彦兵衛のあらわした本書の内容が、室町時代から現代まで受け継がれてきたことを物語っている。

〔龍吟秘訣〕の翻刻、写真掲載を御許可下さいました早稲田大学演劇博物館、『金笛集』の調査に便宜をお図り頂き、写真掲載を御許可下さいました西尾市岩瀬文庫に厚くお礼申し上げます。

注

- (1) 天野文雄「観世方笛之次第」(『能楽研究』第八号、一九八三)。
- (2) 森田光春「森田流奥義録」(『能楽書林』一九八〇)。
- (3) 〔龍吟秘訣〕では、「18ウー20オ」「20ウー19オ」「19ウー21オ」となっている。
- (4) 牛尾美江「牛尾玄笛と牛尾藤八」(『能楽研究』第七号)。牛尾惣衛門が誰であったのかは、牛尾玄笛の弟子で、一時宗意の養子だった牛尾藤八かともされるが、結論は出されていない。また同稿では惣衛門と小幡の具体的関係についても書かれている。
- (5) 片桐登「手猿楽『虎屋』考——『四座役者目録』注——」(一九九)〔平生〕昭和四十七年一月、昭和四十七年五月)。
- 林和利「能・狂言の生成と展開に関する研究」(平成十五年、世界思想社)。

(6) 〔25〕に「ひ声と云事」という一文があり、そこではひ声とひしきは同じこととされている。一方『遊舞集』『笛秘書集』では、「笛の手に、大ひしき、小ひしき、かんのひしき、ひ声、息さき、かすり、のたれ、…」とあって、そこでは別の手とされている。右両書合せて、「ひしき」の使用例は24回、「ひ声」は18回で、具体的使用例から音高を考察することができる。

(7) 龍、鳳凰などになずらえた笛の由来は、『呂氏春秋』『文選』『風俗通』等から、楽書『龍鳴抄』『教訓抄』『続教訓抄』『體源抄』等に取り入れられて、それが多くの笛の伝書に微妙に変化して記されている。

(8) 伯近真『教訓抄』八に、「一、横笛 又羌笛云。龍吟云。龍鳴云。漢ノ武帝ノ時。丘仲所造也。(中略)昔龍ノナキテ。海ニ入ニシヲ…」とあり。

(9) 大神基政「龍鳴抄上」長承二年(群書類従 第十九輯、昭和三十四年、四十七頁)に、「龍のないてうみにいりにしに。またこのこゑをきかばやとこひわびしほどに。竹をうちきりてふきたり。こゑににたりき。はじめはない一つ、をありたりき。のちにな、つになす。是が故に笛をば龍鳴といふ。また龍吟ともかく。おなじ心なり。抄といふ事は譜の名なり。もろ／＼の抄出といふことは。要じをしるしいたるふみを云なり。上巻といふは。呂をば上巻とす。律をば下巻とするなり。仍外題に龍鳴抄上巻目錄とかきしなり」とある。

(10) 〔3〕の「夫呂律のおこりと云ハこと／＼とんさうより出たる

なり」は、『笛秘書集』『遊舞集』に「音律のおこりハ、悉曇藏より出たるなり」とあり、また「ほうたう和尚」は「道中和尚」、「笛はさうのきは也」は「其笛の像第一也」とある。

「図は一越調今に已上に在之云々」のところに、『龍吟秘訣』も『全笛集』も記述に対応する図がないが、『笛秘書集』『遊舞集』『双笛抄』『能笛秘伝』など他の笛伝書には笛と十二律の図がある。『全笛集』にはこの文はない。文意からも永祿五年の国広から河瀬への伝書授受時に加えられたとも推測される。

『龍吟秘訣』翻刻

凡例

一、翻刻は原文に忠実であることを基本とした。

一、読みやすさを考慮して、適宜句読点を施し、引用されている謡の詞章は「」で囲んだ。

一、漢字は基本的に新字体を用いた。

一、意味がわかりにくい箇所には、適当な漢字を（）に入れて傍記した。明らかな誤写と認められる箇所は「ママ」と傍記した。

一、基本的に一ツ書の項目ごとに通し番号を付した。

一、曲名に付された鉤印、文章冒頭の○、△印（少数、単語間の・（いずれも朱）印等は省略した。ただし「6」の弧（朱）はそのまま付した。

一、『全笛集』との異同を下段に記した。

永祿五年
龍吟秘訣 全

笛一道におゐてハ此書に越る書なし。至極の秘書也。努々妄ニすへからず。笛を不吹ともケ様の秘書は大切にすへき事也。〔1〕

全笛集

慶長二年

1 底本は表紙見返への書き込み。
この三行「全笛集」にナシ。

2 先いきーいき

凡笛稽古の様、曾而初心の時吹はしむるは、先いき、同手のすこしあかるをもおほへたらん時より、いかにもふとき笛にて吹へし。いきもおとなしく出て、手なとも自由に心得たらむ時より、なりかゝりをもなおし、主のきこんにかなひたる笛をもつて吹へし。扱心も手もるつうの時よりは、すこしいきよりほそき笛にて吹物二候。常にひ、きのなき所にて、響を吹出す程可吹事二候。ひ、きの有所にて稽古すれハ、おのか音にまよひて、おのつから笛もよハくおもしろくなるによつて、是を嫌ふ事のあひかまへて、けいこに神変ハある事二候。〔2〕
夫呂律のおこりと云はことくくんとさうより出たるなり。かんのしよに曰ク、

扱心も手もるつうの時よりはさて心もおとなしくなり、手も御通の時よりは

(伏儀) ふつき、(神農) しんのう、(黃帝) くわうてい、此三代唐の帝のはしめなり。皇帝の御時十二律をつくり、上の六呂を陽になそらへ、下の六律を陰に用てほうわうし(鳳凰)をう(凰鳴)の声にたくへてきりたる也。又笛ハ龍の吟するこえと云説も有。横笛和国江渡る事は、ほうたう和尚より。慈覺大師の御相伝有し也。笛はぎょうのきは也。図は一越調、今に山上(マツ)に在之云々。穴を七ツに定る事、七星をへうせり。以上九ツの穴より声を出す事、九曜をへうせり。五調子といつは、地水火風空也。陰陽と云ハ、萬のすむ物は上て天となつて陽氣をくたし、にこる物はミなと、まつて陰氣を請。呂といふは陽氣を下、律は陰氣をうくる。かるかゆへに陰陽和合する声を出す。仍能乱舞、笛より初而笛にておさむる。いつれの道愚かならすといへとも、分而稽古たしなミの上よりおのれと音しほなと面白く成へき也。〔3〕

調子之次第

春 双調 木 青 東

3こえ一音
 和国江一和国に
 慈覺大師の御相伝
 一慈覺大師御相伝
 山十已上
 云々一ナシ
 以上九ツの穴一
 前後九の穴
 一にこる物はミな
 一にこる物皆
 能乱舞一ナシ
 成へき也一可成
 と也

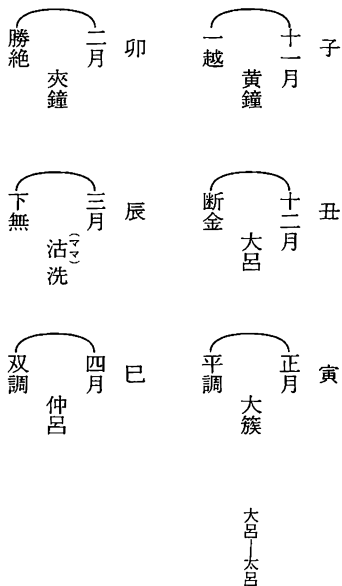
夏 黄色 火 赤 南
 秋 平調 金 白 西
 冬 盤色 水 黒 北
 土用 一越 土 黄 中
 〔4〕

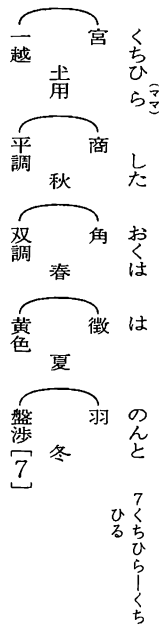
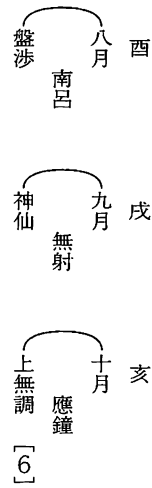
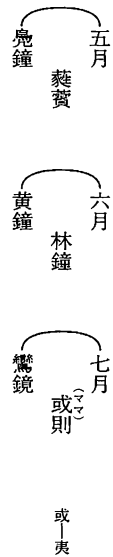
十二調子

一 断 平 勝 下 双
 鳧 黄 鸞 盤 神 上
 〔5〕

一、十二月ノ異名則十二律にあたる時之調子、
 月々調子之次第

6月々1月之





五音
祝言 幽玄 恋暮^(ママ) 哀傷 蘭曲 [8]

一、拾鉢と云事。心持十有事お云。おくにしるす。十鉢のすかた和哥にてしるハ別也。それハ花伝抄に在之。^[9]

一、人前にて笛吹候時、双調にも黄鐘にも定たる手あり。後ハなにとも候へ、最初に入事

9 心持十有事お云
— 心持の十有事を云
それは花伝抄に在之— 其ハ花伝書抄に可有之

一、勸進能の次第。洛中は三日、洛外は四日也。
初日。五いきに吹。のたりの数よせてまで五ツなり。

同。翁之舞の吹出定也。吹とめ各別なり。信の吹、可秘々々。

二日。三いきめに少略する様有。

同。翁之舞の吹出、初日と各別。かんの穴より吹出。

三日。初いきに略して吹様也。

同。翁之舞の吹出。かんの二ツより吹出。

四日。有時はひしく也。せんさいふより初る。

同。翁之舞は初日へかへる。^[11]

一、翁之笛之事。座付のひしき過てやかて高音に吹。りよにとめて、「百々たらに」とうたひ出す様に可有之。是ははくのだらにと云。^[12]

一、「さいはひ心にまかせたり。と、」と云所に

呂を吹て、「ちりやたらり／＼ら」と云て聴而ひしきを吹。^[13]

一、千さいふのうちの事。

二度舞あり。前ハ高音より吹て、ゆりをさうに五ツ吹。後の舞はのたり数五ツ。舞と

11 洛中は三日、洛外は四日也— 洛中三日洛外四日なり
信の吹— 信の吹様なり

初いきに略して吹様也— 初のいきに略儀あり
かんこ— カン上
二ツより吹出。
— 二ツより吹出。穴秘事ナリ。
ひしく也— ひ声也
翁之舞は— 翁之舞

12 ひしき— ひ声
高音に吹— 高音に吹きそらして、たらに— たらり
13 と、— 百々
ひしき— ひ声
14 ゆりをさうに五ツ吹— ゆりを五ツ吹
後の舞は— 後の舞

めてひしきを吹て、やかて信の呂を吹うちより、「あけまきや」と謡出す様に。地取あり。

ひしきーひ声

[14]

一、「座してゐたれともまいらふ」と云「ま」の字より、呂にてゆりあくる。[15]

一「千はやふる神のひこさの昔より、久しかれとそいハひ、そよやりちや」と云「り」の字より、呂にてゆりあくる。[16]

16 いハひーいはひ
そめけん

一、「今日の御祈禱なり、ありはらや、なしよの翁とも」云、「ありはら」の「あ」の字より信の呂を吹て末を手色に吹納る。口伝有。

17 云ーと云

[17]

一、「そやいつくの翁とも」と云て笛一段習有。心をすまして信に六の下を吹。爰をせいかいはの段と云説有ニ付而、左衛門尉ニ尋申処ニ、た、六の下と云へきよし候つる。[18]

18 と云て笛ーと云
ての笛

一、「そよや」と云て小つ、ミの頭を打て、臙而吹出す手くたり、合にいふかこく定儀有。序破急の事、舞台さき迄を序にする。其より袖をかへすまでを破と心得候。袖をかへしてより急につめたるかよく候。吹とめの事。舞とめとひとしく吹合物二候。然共舞のゆうによつて舞はあまりて笛吹イテ候へ

19 合ー右

序にする。其より袖をかへすまでをーナシ
心得候ー心ゆ候

ゆうにーゆうな
とに

は、吹次様あり。是を覚悟候へは、不苦候。それをならハすしてはやく吹はて候ハ、最笛の越度たるへし。[19]

一、「そよや」と云うち、むそくの段と云也。[20]

一、翁のかへるまくのきハにて色ゆる手あり。跡をいはふと云えん也。初日迄の事なり。此跡を祝と云に二つの義あり。一ニハ、勸進能を能四日有るへき、跡三日の能をかへたるによつて、あとを祝ふと云義有。又一ツハ、翁の入はハ其日一日の能のはしめの入はなれハ、跡を祝と云儀も有。悪事さいなんなき折禱となる。去によつて笛もいづれも地しミのなき様に芸をする物に候。是を翁端ノ笛と云也。[21]

一、さんはさの笛之事。

ひしきより臙而高ねに吹みたして、大つ、ミのかしらをた、むうちにひつと吹てか、る。爰に上古当世の習有。[22]

一、鈴之段之事。鈴を請取て、舞台さきへ行迄平調かへしを吹て、ひつと吹て、おなし手を三返吹て、やかておろす也。おろしは三度可吹。舞とめの事。前の吹出しのことく

吹イテ候へはー
吹果候へハ

吹はて候ハ、ー
吹はて候時ハ

21 まくのきハー迄
ノ路

勸進能を能四日
有るへきーナシ

其日一日ー其一日
日

折禱となるー折
禱となる也

22 ひしきーひ声

23 おろしは三度可
吹ーナシ

ひとつと吹て、おなし手を五返吹てとむる。是本也。但舞手による事なれば、不可有油断事也。ひしき信に吹。右是を式三番之習と云也。仮初にも外見有へからすと云々。

〔23〕

一、翁なしの座付と云事有。貴人外仁杯の俄に被仰付御能なとに、翁なくして能有之。其時の座付也。〔24〕

一、ひ声と云事。日吉と吹子細也。ひしきとよむ也。ひ声と可云能ハ習在之。〔25〕

一、脇能置鼓之笛之事、第一秘事也。先信の呂を吹て、小鼓と心を合せて、いかにもたくましく本の音取を吹事二候。色々^マのゆび有へからす。色えの指とハおとる指の事也。脇能にかきりたる笛の習也。吹とめ余の音取に各別。〔26〕

一、同。ゆりのなき音とりあり。是は略儀たりといへとも、四日なと有へきうちにハ、一日の脇の能に可在之。〔27〕

一、かいこの笛之事。習有。但こしつ肝要二候。笛手くたりを覚たるハかりにても成へからす。小つ、ミとこ、ろを合せて、脇はしか、りより舞台さきへ行て、小つ、ミ打上ケ候

ひしき信に吹
ひ声あり
と云々―云々

24能有之。其時の
―能在之時の

25ひしきとよむ也。
ひ声と可云能ハ
習在之。―可秘。

26第一秘事也―ナ
シ
呂を吹いて―呂
を吹てさて

脇能にかきりた
る笛の習也
―脇能の笛にか
きる事候

28かいこの笛之事
―かいこの事
笛手くたり―笛
の手くたり

脇―脇大臣

迄に、吹もあまさず、たりもせぬやうに吹合る物にて、脇へもよく相尋候ハん事專一也。是ハ習外の分別也。〔28〕

一、能の吹様と云は、高砂にきハまる事にて、此一番の吹様にて萬の能の吹様ハ究事二候。

〔29〕

一、次第の笛高音より吹出す也。手くたり定といへとも、をそくなく出候ハ、末ハ吹次候ても不苦候。〔30〕

一、「今お始めの旅衣、くく、日も行末えそ久しき」、呂を吹てなのらす。〔31〕

一、「旅衣、末はるくくの都路を」と云て大鼓打返すうち、かん。〔32〕

一、「いくかきぬらん跡末も」と云所にて中のを吹。是より末のくたりを吹かけて、謡過てせりふになる迄ゆうくくと吹とむる也。扱ひしき也。是お惣別謡のくくたるの吹様と云也。〔33〕

一、一せいの笛之事。手くたり定る也。吹出

かんの穴より。一声のうち、なかしにてもこしにてもものうち笛あるへからす。〔34〕

一、「尾上の鐘もひく也」と云所、下無。〔35〕

一、「をとこそしほのミちひなれ」と云所、大鼓

吹合る物にて―
吹物に候
脇へもよく相尋
候ハん事專一也
―ナシ
是ハ習外―是習
の外
29能の吹様と云は
―脇能と云は
吹様ハ―吹様

30吹出す也。手く
たり―吹出す手
くたり
をそくなく―お
そくなど

出候ハ、―出候
へハ

〔31〕ナシ

33中―中のかん
末のくたり―末
の手くたり

せりふ―しらこ
と

ひしき―ひ声

34こしにてももの
うち―こしのうち
に

／＼とあまして、後つよに可吹。〔52〕

一、「千秋楽ハ民おなて」と謡よりはつる迄、いかにもゆう／＼と下無調より吹上てひしき也。

53 ひしきーひ声

右是を惣而能之吹様と云也。此外は有へからず。但取入たる習口伝の有事をハ皆是より奥にします。極意之秘説不過之。〔53〕

有へからずーすへからず
取入たるー取分たる

一、老松 序 信 〔54〕

一、白楽天 破 草 〔55〕

一、放生川 急 草

右此三番を信の序と云。手のくたり定たる也。太鼓の頭の数定也。但静舞などにては、

56 数ー数も
静舞ー座敷乱舞

五くさりめを二いきぬいて吹也。是習也。太鼓の数もそれにしたかふへし。此三番に大和かゝりと京かゝりと相違有。京にハ老松、白楽天、放生川とを序破急と定候。大和かゝりハ白楽天、老松、放生川と申候。位如此。両座の分別有儀也。但放生川にハ序の内のおろし不有之と云々。〔56〕

一、伏見。信之序に昔ハ吹候事有。今ハ常の神舞也。〔57〕

一、志賀。神舞。陽神。位高砂同前也。〔58〕

一、難波。前は天女之舞、後は働之舞也。〔59〕

58 陽神。位高砂同前也ーナシ

一、修羅にハ舞なき物也。されとも草荊敦盛ハ、

60 一、一「ナシ

「拍子を揃へ声を上げ」と謡に依て序の破と吹。あつ盛は笛の沙汰在之能なれハ、其か

序の破と吹ー破とハ吹

なくしてハ不可叶事也。「あの上野にあた

あつ盛はー惣し
てあつともハ

つて笛の音の聞へ候」といふまへに中のかんを吹て、其次のくたりを不吹してまちて、

「笛の音の聞へ候」といはするやうに可有之。

「草刈りの吹笛ならハ是も名は青葉の笛とおほし召せ」と謡内に、佛といふ吹様有。

〔60〕

一、清経ハ別而習有。「ねられぬにかたふくる、

61 清経ハー清経なとも

枕や恋をしらすらん」と謡てなになしに太

ねられぬにー、
ねられぬに

夫すこゝと出る。「聖人に夢なし」といひ

出す間の笛之事。習又分別有。か様の所を

枕や恋をしらす
らんー枕や恋を
しらすらんー

無文の能の習といふ。〔61〕

一、こしよりやうてうぬきいたし、音もすミや

いひ出すー謡出
す

かに吹ならし」と謡所、是もすミ渡りたる吹様也。下無調より吹上るやうに吹也。

〔62〕

62 吹様也ー様なり
吹上るーゆりあ
くる

一、後のはたらきの事。八島などにハ大きに替

へき也。八島は「又修羅道の時の声」とい

63 八島はーナシ

ふてより氣をかへていさむ心を持、清経は、「うき音にしつむなミたの雨の恨めしかりけ

る契り哉」と謡て、なく内より吹出す働な
れは、心持しうたんに思ひ入たるやう也。
能々分別有へき儀也。〔63〕

一、江口 信 序

采女 草 破

芭蕉 草 急

右此三番お女の信の序と上古にハ申候。今
は、脇能に信の序有なれハとて、本の序と
云。別而習有。初心にてハ不吹序也。大鼓
小鼓も覚語する人稀也。平調返になる其
請様有へし。扱舞にかゝる所に二ツの吹様
有。殊更千賀意流の秘する所也。

江口。舟に乗内に忘手と云事除也。采女。「此
の山に住玉へは、わしの高根とも」と云処、
かんの指より吹上て、末をつなる。

芭蕉。後の出ハ、「あら物すこの庭の面や」
と云所、其吟声の渡る様に心持有へき也。
惣而本の序と云ハ、手くたり吹様定りたる
ま、縦鼓よりかゝると云とも、吹はてす
してハ舞にかゝるへからす。されは花伝抄
に君臣の位をおもへと有、此事也。諸道の
内に太夫を君の位といふは勿論の儀也。つ、
ミを君にして、太鼓、笛を臣にする能もあり。

なく内より—な
くより

64 草 同

初心にてハ不吹
序也—ナシ
其—より

つな—つなく

と云所、其吟声
—と云其吟声

舞にかゝる—舞
に成
太夫を君の位と
いふは勿論の儀
也—ナシ

笛臣—笛を臣

此等の三番ハ本の序と名付るよりしてハ、
序は笛か君の位にして鼓ハ臣たるへし。仍
笛を正敷はやすへき事也。〔64〕

一、野々宮。「人々なかえに取つきつ、」と謡よ

りにきく敷吹て、「月にと返すけしき哉」、
高音を吹返してゆり有へし。舞にかゝる跡
を、いかにも信にうつくしくと云事に、当
時人のまとふ事有。是たんれんのなき故也。
笛おうつくしくと云事を、よハきと心ゆる、
仍か様のうつくしとよハき能を、つよくあ
らけなく吹故に、其はやしのらぬ物也。さ
様の人はつよきと云事ハ、音をふとく、た
くましく吹をつよきと心得、なへらかにふ
き、其能に似合候をよハくして、うれへに
成と斗心得候。相伝なき事成へし。たとへ
は花を吹風は、よハきおもつよく思ふ。是
花のよハくあたなるを惜故也。松に吹風は、
つよけれどもいとす。是松のつよくある
に依てなり。よハき能を花にたとへて、嵐
を強くふかせてハ、いか、有へき。よく分
別かん用。されハ物毎に陰陽の心さしをわ
するへからす。以ておなし。た、あらけな
くた、く斗りハ、つよからす。つよかるへ

65 と謡より—と謡
うち

名付るよりして
ハ、序は—名つ
くる事よりして
序ハ
正敷—正に

跡—所

うつくしと云
事に—うつくし
くかゝるへし。
惣而笛のうつく
しと云事に
たんれん—た
んでん

さ様の人—其人
其能に—其物に

相伝なき事成へ
し—相伝分別の
なき事なるへし
よハく—ゆわく
して

つよ—あるに—
つよきに

されハ—あらさ
れば

以ておなし—是
ハ笛—道に不可
限、鼓大—皆以
おなし

きをよハくせんこそ口おしき事成へけれ。

[65]

一、定家。あひのうたひ「草のかけなる露の身」

と謡処、一日ひやうしとなり、高ねを吹て、

次を「弔ふゑんは有難や」とうたふても笛

を吹あまして、「夢かとよ」謡出す吟声通つ

るやうに、呂よりわたすへし。此等を習の

極意とす。此序名のある舞也。信の序にて

もなく、又常の序にても有へからず。日ひ

やうしを離るゝと云事、此舞の内にきわま

る也。[66]

一、夕兒。序の破、吹とめ呂にとむる。[67]

一、朝兒。序の舞、かんより吹出す。[68]

一、誓願寺。序の舞、心持専なる能。殊勝にして、

さすかきやしやなるかたを本とする也。

[69]

一、羽衣。うきくとしたる序の舞也。

物着あり。後のはたらきの舞、少ひきたて、

よきなり。[70]

一、当麻。「花ふりいきやうくんし」と云あたり

より、ゆうくゝと中のかんへ吹そらして、

太夫かくやへ入迄に吹とめ候様ニ。はのま

い也。いかにもさしはつてつよし。[71]

口おしき事成へ
けれ—口おしけ
れ

66 一日ひやうしと
なり—ひやう
し也

謡出す—と謡出
す
通つ—通する

日ひやうし—ひ
やうし

67 夕兒—夕顔

68 朝兒—朝顔

70 物着—草の物着

一、百万。「比目の枕しき波の、哀はかなき」と

云所、昔より沙汰有。おとしかくる色えと

云手有。[72]

一、杜若。いかにもすぐひ立てかろき舞也。少

もしつまぬ能也。草の物着あり。観世方ハ

白はやし也。秘事。[73]

一、小塩。序之舞、静にかろく、いかにもしん

しやうにほけくゝと吹。[74]

一、邯鄲。「玉のみこしにのりの道」と云所を、

かんをにきやかに吹そらして、「上人と成そ

ふしきなる」と云てらんしやうなり。こゝ

ハいかにもいそきて出る所なり。楽の事別

而習有。夢の内の舞とて、吹出余の能に各

別なり。台よりおりてより少をしたて、

次第につむる也。黄鐘たるへし。若急ニな

つてハ、盤渉へうつしなとしても不苦候。

但つき能杯に在之ハ、てうし其まゝたるへ

し。[75]

一、富士太鼓。「今は歎くに其甲斐もなき跡に残

る思ひ子を」と云所、うれへの手を吹下して、

ゆりあけて末をふきつくへし。楽の事。是

又余の能に各別せり。哀傷の樂是也。黄色

の時は定たる手色あり。大略盤渉可然候。

72 沙汰有—沙汰有
也

73 草の物着あり。
観世方は白はや
し也。秘事—ナ
シ

74 かろく、—かろ
し

75 らんしやう—草
のらんしやう

別而—分而

余の能に各別な
り—余能に各別
せり

つき—ナシ

76 定たる—究たる

吹出し定なり。習有。〔76〕

習有―ナシ

一、唐船。楽、船中にての事なれば、余の能ニ
ひきかへて、かるくうき／＼と可吹。惣而
楽ハしつかに有物なれとも、此能は帰国を
悦と、又しつむ事をいむによつて、うきや
かによく乗心持よく候。〔77〕

77 此能は帰国を悦
と―此一番は帰
国悦と
よく乗心持よく
候―乗かよく候

一、関寺小町。京か、りハ、「百とせは」と謡て
より呂より色えて舞にかゝる。からひてき
やしやに吹。大事の習有之。〔78〕

78 下無調―ナシ
大事の習有之―
ナシ

一、通小町。「なミたの雨か」と云てはたらく也。
「あらくらの夜や」と云所の色えなれば、い
かにもしつかに吹あくる也。盤渉に夜るの
遠音と云手有。〔79〕

79 はたらく也―は
たらき

一、卒都波小町。「しやうゑの袴かいとつて」、
是ハ吹出しに習有。すぐひあくるゆりと云
色えなり。猶可尋之。〔80〕

と云所の色えな
れば―と云出色
えなれハ

吹きあくる―呂
より吹あくる
盤渉に夜るの遠
音と云手有―
ナシ

一、道成寺。乱拍子の笛之事。是定たる習有。
各別の呂有。吹出之事。控の段より小つ、
ミ打入て、かしらをうちてもとの地へなし
て、太夫「みちなりのきやう」と謡出まへ
に吹とめて、呂の吟声の通するやうに可吹。
舞ハのはの也。いかにもかる／＼と吹重也。
口伝有。〔81〕

吹重也―吹
口伝有―ナシ

一、とをる。

「あら昔恋しや」と云所、恋乃音取を吹下
して、ゆりあくる手を吹也。舞はは也。

きうの急也。又尺乃舞と云事有。昔ハ一廻

尺曲作物

候間しらはたらきにして、太夫働を見て舞
にかゝると申候。今程はいか、。但太夫を
能可見事專一也。〔82〕

82 尺當作筋―ナ
シ
太夫働を見て―
さて太夫をみて
と申候―と云
今程はいか、。
但太夫を能可見
事專一也―ナシ

一、松山鏡。「父は泪にかき暮て」と云所、うれ
への手を吹。はや笛。〔83〕

83 松山鏡―松乃鏡

一、鞍馬天狗。「花ぞ知るへなる、こなたへ」と
云所々、下無調より吹上ル。速笛。働ハ舞也。
常のはやし舞の様に候へは、太夫のさバき
ならぬよし。いかにも吹きみたしてハらり
と吹。〔84〕

84 と云所々―と云
より
下無調より吹上
ル―呂より吹上

一、愛染川。「あいそめ川に身をなくる」といふ
云所にて、うれへの手を吹也。〔85〕

太夫のさバきな
らぬよし―太夫
のさはきならぬ
由申候

一、常陸帯。「契りかけたりや、かまひて守り玉
へや」、恋乃音取を吹也。〔86〕

85 所にて―所

一、二人静、吉野静、紅葉狩。

86 恋乃音取を吹也

此三番ハ陰に謡とむる能なれば、呂より吹
上る。か様の事いつれにも可渡候也。又陽
に謡留る能は高音より吹出。陰にても陽に
てもなく、中に謡とむる能有。たとへは、

87 此三番ハ―此三
番
いつれにも―い
つれも
可渡候也―可渡
候

千寿重衝、「忘めや」など謡とむるやうなる能おは、下無調より高ねへ吹わたす。是等の事一段秘する事に候。〔87〕

一、盛久、春栄、御前鉢木、七騎落等の男舞之事、

何も同位たるへし。第一、男舞ハつよく少もたるまぬやうに可吹也。〔88〕

一、是戒、大會等の早笛、何もしつかにいかにもよくのりて吹事候。〔89〕

一、張良、昭君、鶺鴒等の早笛ハいかにも急に吹

まことのはや笛成へし。惣而鬼の能に二ツの名あり。りきとう、さいとうと云。りき

とうハいかにも力を入れて静成はや笛也。さ

いとうと云はかるくはやし、おもてお云時ハ、大へしみを力とうといひ、とびておさいとうと云也。是あうんの二ツ也。はお分

別すれハ速笛之位ハ究者也。〔90〕

一、錦木、松虫等の黒かしらの能は、うきく

として、ふミとめぬはやし也。吹出しは相違せり。〔91〕

一、西行楼、遊行柳。何も序之舞也。

老木の花のせい、朽木の柳のせいなれば、女の序杯に吹は不似合候。少からひてほけ

く可吹也。〔92〕

90 早笛ハ早笛

はや笛ハ早笛

りきとうハりきとうと云ハ

かるくはやしハかるくしてはやし

速笛ハ早笛

91 能ハ能

吹出しハ吹出

92 遊行柳。何も

ナシ

朽木の柳のせい

ナシ
吹ハ吹も

一、海人。出羽の笛たくましくふき、「あら有難

の御経や」、中より吹出ス。舞にかゝる所、

京かゝりハ、経を大臣に渡スを見て舞にかゝ

る。大和かゝりハ、経を渡して仕手柱のき

ハ迄立退、大臣をつくく見てなくを見か

けて台舞にかゝる。然れ共時による事なれ

ハ、専に仕手を見るへき也。〔93〕

一、遊屋。文の末に「ふること迄も思ひ出の、

なミた」と云所りよを吹。「よしやよしなき

世のならひ」と云所、中よりおとしかくる

手を吹。本のくりあけにてハあるへからす。

舞の事。京かゝりハ、「ふかき情を人やる」と

と云内より吹出して、色えて舞にかゝる。

大和かゝりハ、「なにと舞おまへと候哉、中

くの事」とこたへて、大つ、ミかしらを

うけてはにかゝる。両座の相違は也。〔ちる

ハ泪か、爰の色え短冊之段迄の笛吹合大事

也。縦いか様に吹つき候共、けんかくにな

き様に、つきめ見へぬやうに吹事かん用也。

〔94〕

一、三輪。「下樋の水音も苔に聞へて閑なる」と

云所、おとしかくると云手を吹。たとへは

百萬の「比目の枕しき波の」と云手同前。

93 海人ハ海士

見て舞にかゝる
一みてかゝり候、
又

仕手柱のきハ迄
立退ハ一廻して
柱の入れ際に
て

94 遊屋ハ遊や

云ハ謡

こたへてうた
いて

大つ、ミかしら
大鼓の頭
泪ハ涙の川や
らん

笛吹合ハ笛の吹
合
つきめ見えぬ
つきめのみえぬ

信の神楽也。七五三のゆりと云事、序の内

95 信の神楽也―信の神楽是なり

にあり。秘する事也。七五三と書て幣とよむ也。七と八天神七代をへうせり。五とハ、地神五代と云儀也。三とハ、天地人の三さいと云儀也。是を吹事二候。さいとハまつりこと、よむよし也。おろそかに思ふへからず。又三輪と杜若、この二番京か、りに白はやしと云事あり。三輪ハ信、杜若ハ草也。笛、三輪に定たる吹様あり。式段ゆりと云事有。一段秘事也。但自然笛の手下り習覚たりとて、仮初にも詞に云出す事なかれ。諸道名を得たる衆参会の時も白はやしと云事無之儀也。まして其外の事ハ中々。神楽ハ扇をひらきてより舞に吹。[95]

七五三と書て―則七五三と書て三さいと云儀也。是を吹事二候―三さいと言儀を似、是を吹事二候

笛三輪に―笛の下り三輪に覺たりとて―覺たるととて詞に―詞にも衆―者

一、立田。おなし神楽なれとも、少の草の心持有。三輪ハからひて殊勝ニ、立田ハうつくしく吹、こへいを捨てより舞に吹。[96]

96 少の少

三輪ハからひて殊勝ニ、立田ハうつくしく吹―ナシ

一、あたか。ゆう僧乃舞なれば、いかにもつよく可吹也。当時おとこ舞のこことく吹出候事、以外のあやまり也。[97]

97 こことく―様ニ

一、小督。「さこそ心もすミ渡る」など、云所、景気のおもしろきやうにゆうくとかんより吹候てよく候。舞の事。是も男舞の様に

98 景気の一景氣様に―様には

吹す候。高ねよりはにかゝる、うきたちてきやしやなる舞也。可有分別候 [98]

一、松風村雨。「あの山本の里までハほと遠く候程に、是成海士の塩やに立越一夜をあかさ

高ねよりはにかゝる―大家かふりにてまふなれハ、高音よりはにかゝる

はやと思ひ候」と云時、ひしき候。小鼓より打出すも有。一声のうちいかにもしめやかに可吹。「よせてハかへるかたほなミ」と云所より、かんの指より吹返して、「あしへの田鶴こそハたちさハけ、四方の嵐も音そへて」と謡迄に吹候はて不叶手くたり也。秘事。

秘事―秘事也

しんの物着はほのかに吹出。あいしやうの物着とも云。三重の心持あるにより、物着之段と云。口伝有。

物着は―物着也。あるにより―あるによりて

舞之事。「立わかれ」と云うより中の指より吹出。後の働之舞、おろしあるへからず。但余の能と不混、松に執心して太夫えたにたハふれゆうをする見かけてより、少吹そ

下無調之事―ナシ

らして吹手あり。さりなから座敷などにてハ、人の耳に立事なれハ無用に候。ひとつと吹とむる。[99]

能と不混―能に不混

一、楊貴妃。「哀こてうの舞ならん」、そのはたらき松風の舞の吹出と同前。序之舞也。い

松に執心して太夫えたにたはふれゆうをする―松の枝にたはふれ大夫ゆうをするを座敷―常の座敷

かにもしめやかにおもひ入て可吹。高音の吹おろしてゆり有へし。かゝる所いかにもしんに。惣而有文無文とて、能と心持專一也。この能有文の能也。一かとけたかく地しみのなきやうに、りよりかゝる。[100]

△加 観世与左衛門国広雑談にいはく、楊貴妃は玄宗皇帝ノ天上在テ、けいしやううゐの曲を習給ひて楊貴妃におしへ給ひし能なれば、結構なるうつくしき能は不可過歟と云々。[101]

一、東岸居士。「あそひたわふれ舞とかや」、はのまひかるくすくひたて、吹。かつこお吹前一段舞也。中三たん、かつこ後一段舞。以上五段とて可心得候也。[102]

一、自然居士。「つれなき人の心かな」、舞。いかにもうきくと吹。かつこハやかてかゝる後、舞に吹。

惣而かつこの名はさかりはと云也。さうのはやし也。はやきハかつてふかれす候。又しつミ過たるもわろく候。うきたちてのるやうなるへし。[103]

一、太平楽。わたり拍子後舞有。[104]

一、浦島。はのまい也。[105]

100 「哀こてうの舞ならん」、そのはたらき松風の舞の吹出と同前ナシ

かゝる所いかにしんにナシ

能と心持專一也
一能の心持ある也

この能一此能もりよりかゝる一呂より信にかゝる

[101] ナシ

102 かつこお吹前一段舞也。中三たん、かつこ後一段舞。一かつこの段三段。前後宛舞に吹なり

以上五段とて可心得候也ナシ

103 吹一吹へし
ふかれす候一不吹候

うきたちて一よくうきたちて

のるやうなるへし一のるやうに可吹

一、たいさんふく。はのまい。鬼の出羽有。後に天女出る。[106]

一、山姥。「松風ともに吹笛の」、中ノかん。此所に故実有。謡はなして、つゝミのかしらを打間に吹事二候。さ候へは人のき、知事二候間、松風と云えんによせて吹出して、人聞候時ハ、はや吹はて候様に有へし。かやうに笛の事をうたふ能は、其心得なくてハ不叶事也。乍去ふき候はても不苦候。

働之事。女の鬼なるに依て、鬼の働と思ひ吹候得ハ、つよく過候。又女の働にハよはく、思慮肝要に候。[107]

一、葛城。序之舞也。時によりてはにも吹也。

一、少神楽の心得あり。[108]

一、景清。無文の能。平家のうち平調返をそと耳にたち候ハぬ様に吹事二候。平家の調子、平調の物二候間、其氣遣に候。[109]

一、養老。むかしより位大事の物二候。はの舞、初段のおろし定たる也。[110]

一、狸々。わたり拍子うきくと吹也。是に三重の習有。取分当流に秘する事二候。ミたれの事、仕手を可專。太鼓の頭を(きこ)かけてかゝる也。是に又三重のかゝり様あり。前後二

107 吹事二候一吹候へハ、

さ候へは人のき、知事二候間、松風と云えんによせて吹出して一やがて吹出して
人聞候一人の間候

能は一能二ハ

乍去ふき候はても不苦候ナシ

つよくつよ

[108] ナシ

109 耳に一人の耳に

物二候間一物に候

110 定たる也一定る也

かけて一うけて

段を舞にして、中三段をみたれとす。上古ハ前に舞を吹ぬれハ、乱のまゝにて果候。今ハ右の分二候。惣而此能は草のはやし也。ゆめく信におもふへからす。ミたれを秘するによつて、人毎に信の能と思ひ候。信に心得ぬれハ、曾而ならぬはやし也。[11]

一、師子。石橋、望月、式番師子也。但望月はさうのはやし也。

「今いく程によも過し」と云てらんしやうを吹。師子にかゝる所に習あり。りよよりかゝる切拍子と云事、笛の心得の肝要也。吹上之事、あまねく人に許す事なし。笛より吹上る手を聞て太鼓打入物に候間、槌に相届候様ニ可吹事専二候。返々師子の事、拍子の外の物二候。はやきを手柄と思ひても、のり候ハねハ、曲なき物二候。しつかなるはきかれす候。よく口伝肝要二候。ぬくる手、おとしかくる手とて二ツの大事あり。[12]

△加 観世与左衛門伝。追懸る手、追まハす手。此二ツ太鼓ニ有。笛ニ相当。又長短の吹上可秘云々。[13]

前にもしるし申ことく君臣の位と申事専二候。太鼓を正にはやす能も有。

111 舞を吹ぬれハ舞なれは

右の分二候ー右分候

草のはやしー草の能

はやし也ーはやしにて候

112 望月、式番師子也。但望月はさうのはやし也ーナシ

吹ー吹て

あまねくー当流よりあまねく

吹上る手を聞てー吹上るを聞て

打入ー打こむ

ぬくる手ーぬくる手

113 ナシ

114 申ことくー申候ことく

神楽、かく、ミたれ、獅子なとハ、笛君の位にして、残る役者はミな臣下と成なれハ、笛を正にする事なるへし。第一仕手をはやす役者なれハ、太夫を専二すへき事不珍義也。有文無文と云ハ、其能のうちの諸道の中に、なに、てもめつらしき事の有を有文の能と申候。無文の能とハ、謡にもはやしにもきとくなる事ハなくして、さすかゆへある能有事候。それを無文の能と云。是仕手の大事にする事也。上手の手からといふはこれ也。[14]

一、心のつめひらきと云事。たとへは其能にハなにをおもてにあて、出るそと思ふに、俄に引かへて別のおもてなにて出る時ハ分別して、さする人の耳に立候ハぬやうに位をかゆる事二候。[15]

一、時によりうきやかにはやし候ハて不叶能とおもへとも、しつミはて、うきあからさる時ハ、三段四段めなとに可吹急なるおろしを初段式段に引上て吹候事二候。また一かとおししつめて可吹。はやしさきたつ時は、いかにもしつかなるおろしを吹かけて心にしつめ候事二候。[16]

太鼓を正にはやす能も有ー太鼓を正にはやす能も有 大つ、ミ小つ、ミを正にするもあり

獅子ー師子

位にてー位にして

太夫ー大夫

中になに、てもめつらしき事の有ー中なにて、ても珍敷事有

と申候ーとてもてはやす事二候

能有事候。それをー能なとを

116 一かとー一かと、

一、能書番の間ハとても笛をはなすへからず。

117 はなすへからず
—はなさず

殊更京か、りハ、兼而定もなき所にてしほ、
えつれば働事あり。心懸る其謡のえんに似
合候様に可吹事、肝要候。真実か様の事、
習の外二候。〔117〕

所にて—所に
心懸る—心かけ
て

一、勧進能などの時、四五番目などにハ、芝ゐ

もさハかしく、調子なとくるひ候時ハ、う
たひのうちをめらして吹物二候。さ様に候
得ハ、うたふ衆も調子かるそと意得て、次
第にめらしてうたふ物也。さてまひになる
時はつしと吹候へは、おのか心もくらきよ
りあかりへ出たるやうにおもはる、也。諸
人も一かと有やうにおもふ物也。又勧進能
などの心持ハ、大かたにする芸はうつもる、
物也。いかにも氣をはつて、うきたつ心を
持也。氣のしつむ時は、則する役の音迄あ
しくきこゆる物也。一切は氣遣にて候。

〔118〕

一、舞のおろしなども、太夫いかにもゆうく

と立、やすらふ時は、一かとあるなかきお
ろしお吹。またすらくひとひきたて、行時
は、かるき手を吹事に候。〔119〕

一、座敷乱舞杯に我程の役者餘多有へき時は、

120 役者—役

118 あかりへ—あか
りに
おもふ物也—お
もふなり

119 すらくと—ナ
シ

余の笛なかしく序を吹たる跡に可吹時
は、引かへてミしかく吹。りよよりか、り
たらハ、高ねよりか、りなとするやうに有
へし。但其座に上手あつて吹たる跡に可吹
時は、いかにもろくに、おろし杯もつねに
有事を吹物二候。少も耳に立事をすれば、
上手に近しやう心ちして片腹いたくおもは
る、物二候。〔120〕

有事を吹物二候
—有手をふく物
候
耳に立事—耳に
たつ手
近しやう—おし
やう

一、或ハ外人、貴人又ハ兒若衆の、つ、ミ、太

鼓杯を被遊、其御相手にならハ、いかにも
すくなる手を吹、地などおもしろくに吹物二
候。色々の手を六かしく吹かけなとする事、
慮外の一二候。但たとひ貴人外人成とも上
手杯にて、それをけうにある乱舞の時は、
一かと有へし。〔121〕

121 兒—御ちこ
つ、ミ—御つ、
其御相手—御相
手
けうにある乱舞
の時は—興など
に入時ハ

一、余の人盤渉などにて吹たる跡に可吹時は、

双調をそと吹て、さて黄鐘を吹へし。是ハ
座敷にての事に候。さ候えハ、盤色の跡に
黄鐘を吹ても、けんかくせぬ物に候。又我
盤渉を吹て人にわたさハ、やかて黄色を卒
度吹てをく物二候。是氣遣之一二候。〔122〕

122 跡に—跡にて
我—わか

一、座敷の大小により氣遣肝要に候。ひろき座
敷杯にてハ、はやしの位より少引たて、

123 氣遣—氣被

音をも力を入れて可吹事二候。又六帖敷四帖半なとにての乱舞の時ハ、双調成共黄鐘成とも、いかにも音おうつくしく、手色を專ニ可吹事に候。先人の所望の時は双調を吹て、舞の一、二ツほとも同調子にてよかるべく候。さて本調子になるとても、少めり候様に吹事、小座敷杯にてのこしつにて候。

[123]

一、其座に尺八吹などのあらハ、調子をか、へて吹物に候。いきおはかりに吹事、口惜事たるべく候。笛吹と人に知る、程の者ハ、かり初の座敷へ行共、人の雑談おも調子を心かけて可持事に候。ふと笛所望の時、雑談の調子にたかひぬれハ、おかしき物二候。さありとて耳に立つやうに調子を吟する事、片腹いたかるべく候。只心掛かん要と申事二候。

右舞台にて五ヶ條。座敷にて五ヶ條。合拾ヶ條、五音の次に十体申候つるハ此事二候。萬事氣遣なくしてハ諸道成へからず。殊更笛杯は物数多き事に候俟、常ニ此志肝要二候。[124]

一、盤渉にて可吹心得之事。勸進能にても一日

乱舞の—乱舞なとの

よかるべく候—よかるへし

124人に知る、—人の知る

雑談おも—雑談などを

心かけて—心にかけて
吟する—吟味する

いたかるべく候—いたかるへし

拾ヶ條—拾

十体申候つるハ—十体と申つるハ

此志肝要二候—此者肝要候

[125] ナシ

能にても、三番または五番迄は用捨可有。融なとハ勿論の事、海士時により盤渉可然候。静成舞にも調子にえん有能、苦かる間鋪候。舟弁慶、桧垣等の舞、盤渉なと珍しかるべく候。さ候とて必吹候はて、不叶にては有へからず。殊更終日の乱舞などの時ハ、おなし調子迄は無文なるへし。但双調黄色の後、黄色へ分かへり候。双調迄さかり候事稀と云々。四季の調子をうけて可吹心得、对其主亭あいさつたるへし。然共秋は平調本調子なりとても、舞なとハならぬ事なれハ、卒度氣遣可有之。かくを盤渉にて可吹心持、近々前にしるし候ま、不及沙汰候。[125]

一、対謡笛之氣遣之事。第一、応謡調子尤たる

[126] ナシ

へし。さて舞に成時は、一越より双調迄六調子のうちにて初終と越るならハ、初二、三度も双調にて吹、其後ハ至而黄色盤渉の間に不能氣遣、謡黄色二成候時ハ盤渉にて可吹候事可有斟酌。但能謡によるへき間分別肝要の由二候。[126]

一、ほうゑの事。盤渉にて吹音取なり。いかにも信に吹。ほうゑの舞は陽、乱拍子陰也。

127ほうゑの事—ほうゑの舞之事

翁の舞と女の舞とのかはりめなり。何も乱拍子ながら調子かハるなり。〔127〕

一、わたまし（マ）の笛之事。初に黄鐘を不吹。わうしきは火の調子なるによつて忌る事二候。

双調は木の調子なるま、似合候。〔128〕

一、船中にてかへる手と云を吹す。六の下是なり。

一、暇乞の笛と云は、船中にていむ手を吹。かへると云えんによる心（マ）を吹か。〔129〕

一、呂に信草行有。人の所望の時（マ）は、草の呂を吹て、半音取と云を吹へし。ゆりのなき音取なり。〔130〕

一、貴人江笛懸御目時は、かまちを出、同輩にハよこに出す。下輩へはせミのかたを上へなして出す物也。乍去、夫迄ハいか、尺八もかはの上を持たるかよく候。竹の上ハ氣遣可有之儀候。〔131〕

一、軍陣之笛之事。覚語候（マ）ハて不叶儀ニて候。事を分て可書明段ハ、はてなき子細二候。先四季に王をする調子を可吹儀、最第一也。若敵王の調子を吹かけたらハ、

甲順、乙順ハと可吹。口伝有。〔132〕

右笛左衛門国之より伝授の条々しるし置候。

乱拍子―乱拍子ハ

何も乱拍子ながら調子かハるなりナシ

129 吹か―以か

130 ゆりのなき音取なり―ナシ

131 乍去夫迄はいか、―ナシ
尺八も―笛も尺八も

儀候―儀候歟

132 覚語―第一覚語

儀ニて候―儀候

明段ハ―明段
四季に王をする―玉をする

敵王の―敵より

玉の―

甲順、乙順ハ―

甲順六、乙順八―

口伝有―口伝有

尤可秘々々

笛左衛門国之―左衛門

如此書顯候へは、道のふかきも浅く成行候

得共、当時の人は皆物語などを聞及たるは

かりにて、推量二をのれと道をふミ分てま

ことの道知人稀也。然を可秘（マ）。失事にて

もなく候ま、不顧嘲歟、殊此道の明道各

遂一覽、末世之為重宝、如此相定畢。

春日大明神モ御照覽候へ。心底之在之通、

不殘一点記之者也。自然此一卷之姿、浮世

に学人うたかふ所なくあいかまへて、

邪路に入給ふへからす。た、習覚たる外は、

稽古たしなミよりくふう分別可參候。仍如件。

永正參 觀世座松垣本彦四郎

六月十三日 栄次

右此一帖能々令拝見候。近比秘蜜之儀相聞

候。聊余三不可有外見候者也。

觀世与左衛門尉

永祿五三月上旬

国広

現在

河瀬四郎左衛門殿

ふかきも―ふかきをも

推量ニ―ナシ

道知人―道を学人

然―然者

心底之在―心底ニ在

觀世与左衛門尉
門尉
―觀世座与左衛門尉

三月上旬―三月十一日
在判―ナシ
（以下左の通りの奥書あり）

此書大秘書也。可秘々々。

小宮山李進昌世記

笛之口訣、一通り諷何といふ所にて何を吹と斗教る也。此書諷の何といふ所何の字から吹と書記し候事、太切の事也。夫お此書に記したる故大秘書也。

明和六_{乙未}年六月下旬写之

青木光通

右の書物国広より

観世彦三郎自筆にうつし取、

拙者一被渡條、

自然失候てハと

存、かさねて番

留置者也。仍如件

牛尾惣右衛門尉

親頼（花押）

慶長貳年

七月二日

小幡弥兵衛殿參